

前回に続き、株価指数証拠金取引が株価指数先物や上場投資信託（ETF）とどう違うのかを説明します。証拠金取引のもう一つの大きな特徴は、取引時間の長さです。東京金融取引所の証拠金取引の取引時間は、午前8時30分から翌朝午前6時（米国夏時間の適用時は午前5時）です。つまり、東証で取引が始まる30分前から米ニューヨーク市場が閉まるまで、途切れなく売買ができるのです。また、元日を除く日本の祝日も市場が開いています。日本の祝日や夜間に海外発の大きな株価材料が出た場合でも、機動的な対応ができます。具体的な例を見てみましょう。アベノミクス相場が始まったばかりの2013年1月。海外での日本株への期待の高まりを背景に、1月2日の日経225証拠金取引は日

株価指数証拠金取引のイロハ ⑤ 取引時間 深夜も祝日も



経平均の前年末終値に対し4%も高くなりました。逆に、日本株への不安が広がり始めた15年9月は、東京株式市場は国民の休日でも休場だった22日に2%下落しました。日本株の場合、残念ながら投資信託やETF、株価指数先物ではこのような対応ができません。投資は1日に1回

しか価格が決まりませんし、ETFも一般的には東証の取引時間中しか売買できません。大阪取引所の先物は今年から取引時間が拡大しましたが、日中取引と夜間取引の間に1時間強の休みが入ります。また、いずれの金融商品も祝日は取引できません。すでに説明したレバレッジも、ETFに対するレバレッジといえるでしょう。近年では株価指数の2倍の値動きをするよう設計されたETFが登場し、レバレッジ効果が得られるようになりました。ただ、ETFは連動する指数の特性上、相場が上下変動を繰り返すと価値が逡減してしまったり、短期売買向きといえます。証拠金取引は保有期間に関係なく連動性を維持でき、長期投資にも対応できます。（金融ストラテジスト 岡崎良介）